

摘することも可能だが、道真の詩と白詩との間には、その「老い」を実感する切実感・切迫感が全く異なる。換言するならば、道真の詩には「死」を目前とした「老い」の緊迫感が詩情より明らかに読み取ることが出来る。白詩にはそれを嘆きつゝも「春を送る」心情に道真の詩には見られないある種の余裕が窺える。ここでは、白詩からの詩語の措辞という観点よりもっと深い、仏教思想に裏付けられた用字であるうと考えるのがより自然のよう<sup>1</sup>に思える。

### 「513偶作」の根底に流れる詩情の、背景にあるもの」

この作品は、絶筆といわれる「514謫居春雪」の直前に置かれている。筆者の調査した写本・刊本の中で、「金沢市玉川図書館大島文庫本」・「太宰府天満宮所蔵本」、調査刊本十九冊全てに、題字下傍注として次の一文があることに注目したい。

▼「延喜三年癸亥二月二十五薨 五十九歳」

この一文は、本来ならば、前述した『菅家後集』巻尾の作品「514謫居春雪」の題字の注として付されるべきものだと考<sup>2</sup>える。それが直前の作品「513偶作」に付されているのは何を意味しているのか、以下私見を述べてみる。

川口久雄氏は次のような所感を述べておられる。